

知的障害児教育における「総合的な学習の時間」の実践的検討 —「生徒の興味・関心」を中心にすえた取り組みを中心に—

富山県立にいかわ養護学校 高畑 庄蔵
岐阜大学教育学部障害児教育講座 坂本 裕

I はじめに

知的障害児教育, 特に知的障害養護学校における「総合的な学習の時間」の現状とその課題について, 坂本 裕・河田将一(2002)は質問紙を用いた実態調査を行い, 知的障害児教育においては従前から「経験カリキュラム」を根幹とした生活単元学習や作業学習などの「教科・領域にわけない指導」を中心とした教育課程編成がなされており, 今回の「教科カリキュラム」にその基を置く「総合的な学習の時間」の導入に対して非常に大きな戸惑いがあることを指摘している。また, 「生徒の興味・関心」を中心にすえた「クラブ」的取り組みや交流教育などが多くの学校で実施されており, その実施においては「日々の生活の質の高まり」を念頭におき, 「家庭生活などへ拡大」する取り組みとなるように配慮すべきであるとしている。

本稿においては, このような知的障害児教育における「総合的な学習の時間」の授業実践として, 「生徒の興味・関心」を中心にすえ, さらに, 家庭生活への拡大も視野に入れた「クラブ」的取り組みの実践を実施している知的障害養護学校における「総合的な学習の時間」としてのボウリング場利用の取り組みの概要を報告し, 検討を加える。

II 方法

1. 対象校

知的障害児の社会自立を目指し, 「支援ツール」(富山大学教育学部附属養護学校, 2001)などの開発を行い, 障害児を取り巻く環境の改善ならびにその有効な活用の在り方について, 研究実践を行っているA養護学校を対象校とし

た。

2. 対象授業

A養護学校などの養護学校卒業生は, 自宅などで一人で過ごす時の活動内容では「テレビ」, 「CD音楽鑑賞」などが圧倒的に多いこと, 屋外では「家族での買い物・デパート巡り」が多いこと, 運動・スポーツでは体を動かす活動は非常に少ない状況にあった(高畑庄蔵・武蔵博文, 1997)。また, 在校生も, 静的・受動的な活動で変化の無い余暇を過ごしている状況にあった。

A養護学校高等部では, このような卒業生ならびに在校生の家庭での状況を踏まえ, 現在の生活充実に加え, 卒業後も含めた豊かな生活の創造を目指して, 1997(平成9)年度より「総合学習」を教育課程に設定した。それは生徒一人ひとりの趣味や特技, 継続して取り組めることを見つけ, 充実した休日や余暇を過ごして欲しいという願いからであった。

この学習を展開するに当たり, 以下の5点に特に留意するようにした。

- ①生徒の興味・関心やニーズを把握する。
- ②家族との連携・協力が不可欠なので, 保護者の意向を把握する。
- ③多様な生徒に対応するために, できる限りの多様な活動を準備する。
- ④可能な限り地域での実際的な活動を多くする。
- ⑤選択の機会を多くするために, 前期(4月から9月)と後期(9月から3月)の二期制とする

1998(平成10)年度からの実施に当たっては, 本人と保護者に活動内容にアンケートを実施した。その結果を受けての教員同士で協議の上で, 「レジャー・スポーツ教室」「クッキング教室」「カメラ・ビデオ教室」の3つの教室を設定した。そして, 教室の所属は, 本人と保護者の希望で選択することとした。

こうした3種類の営みの中から、本稿では「レジャー・スポーツ教室」を取り上げる。この教室では、地域のボウリング場を、一人もしくは友達同士で休日に利用できることを目標としている。ボウリングは、比較的簡単なスキルで楽しめ、年齢・性別を問わず広く取り組まれているレジャー・スポーツである。また、ボウリング場は晴雨に関係なくいつでも利用でき、必要な用具が全て揃っており、得点集計もコンピュータで自動計算される。さらに、今回利用したBボウリング場は、JRのC駅近くにあり生徒が利用しやすい立地条件である。このようにボウリング場利用の仕方を学習することは、知的障害のある生徒が地域の余暇資源を積極的に活用することを通して、豊かな社会参加の契機の一助となるものとの考えのもとに取り組まれている。

3. 検討方法

授業場面では筆記記録とビデオ録画により各生徒の実施状況を記録した。休日の活動は、約束カード及び本人、保護者、クラス担任からの報告により記録を行った。事例研究として2名を取り上げ、それらの記録を分析した。事例1ではx年9月からx+1年3月まで、事例2ではx年6月からx+1年3月までとx+1年11月からx年+2年3月までの2期の支援状況について検討を加えた。

III 支援の経過と結果

1. 取り組みの概要

生徒一人ひとりが「レジャー・スポーツ教室」での活動を通して、ボウリング場が生徒にとって有効な地域の余暇資源になることを目指し、また、学校での支援や家庭での支援が無理なくつながることを考慮し、現地での実地指導を原則とし継続的に行った。なお、ボウリング場を利用するための一連の流れをTable 1に示した。この手順を決めるに当たっては、ボウリング場の支配人と話し合いの機会を持ち、生徒が利用し易いよう利用手続きの次の3点を依頼し了承を受けた。第1点は療育手帳を提示した場合には団体割引料金とすること。第2点は団体割引

の場合に発行される「シューズ券」の発行をせずに、一般の利用者が行う「シューズレンタル機」を利用できるように料金体系を変更してもらうこと。第3点は忘れ物などのトラブルにあった場合には直ちに学校へ連絡してもらうという点であった。

さらに、ボウリング場利用の流れを生徒一人ひとりに合わせて分析し、Fig. 1に示したような「ボウリングお助けブック」を作成した。このボウリングお助けブックは、写真と簡単な文字を手がかりにして、1つ1つの手続きが分かるように写真と言葉で説明したブック型のものと、どこまで行ったか見失いがちになる生徒が自分でチェックしながら手続きを進めていくチェック表形式の2タイプを作成し、毎時間の授業において生徒が主体的に活用できるよう支援した。

Table 1 ボウリング場の利用手順

場面	単 位 行 動	
申し込み	1 申し込みカード記入コーナーに行く	
	2 カードに自分(および友達)の名前を記入する	
	3 フロントまで行く	
	4 フロントの人に療育(障害者)手帳を見せる	
	5 レーンの番号カードをもらう	
	6 シューズ券をもらう	
シューズ	7 レンタルシューズコーナーに行く	
	8 自分の足サイズを知らせる	
	9 シューズコーナーの人にシューズ券を渡す	
	10 自分の足サイズの自動レンタル機の前に立つ	
	11 自動レンタル機に300円入れる	
	12 シューズを履き替える	
ゲーム	13 レーンの番号カードと同じレーンに行く	
	14 ボールを持ってくる	
	15 自分の番が来たらボールを投げる	
	16 友達を称賛する	
	17 ゲーム延長のボタンを押す	
	18 終了ボタンを押す	
	19 ボールを所定の場所に返却する	
	20 シューズを履き替える	
	支払い	21 フロントまで行く
		22 レーンの番号カードをフロントの人に渡す
23 財布を出す		
24 料金を払う		
25 名前を言ってスコアカードをもらう		
26 お礼を言う		
27 シューズの返却コーナーに行く		
28 所定の場所にシューズを返却する		



Fig.1 ボウリングお助けブック

左は手帳形式の「ボウリングお助けブック」である。ボウリング場を利用する一連の流れが、写真と文で記してある。右はそれを活用してシューズレンタル機を利用している場面である。

また、場面に応じてカードやお金を分類して入れておくことができるFig. 2のような「お助け財布」も活用した。

このようなお助けブックなどを休日も活用できるように、ボウリング場のスタッフに対してその機能と使用方法について説明し、困っている場合にのみ直接支援してもらうことを授業の取り組みの中で、実地に依頼した。

そして、どの生徒もボウリングを通して友達との遊び方や楽しさを知りながら、卒業後も助

け合い支え合える関係を育み、続けていって欲しいと願い、友達と一緒にボウリングが楽しめる環境となるよう、男女や自宅の位置なども考慮してグループ編成を行った。

保護者に対しては、写真を中心に構成した通信「ボウリングかわら版」を発行し、個々の生徒の様子や友達同士で利用可能であることを伝え、家庭でも話題となり、更に休日にボウリング場に出かけるように働きかけた。合わせて、休日に友達と行く場合には、待ち合わせ時間と友達の名前を明記する「約束カード」の記入を行うようにし、家族がその内容を確認した上で出かけるように配慮した。

こうした諸準備や配慮の中で、x年度後期(9月から3月)の授業に取り組んだが、最初は生徒9名いずれもボウリング場利用がほとんどできなかった。しかし、半年間の取り組みの中で、6名は「ボウリングお助けブック」を利用すれば一連の活動を一人で行うことができるようになった。また、残りの3名はいずれもシューズレンタルが課題として残ったが、ボウリング場スタッフの支援を得ることで一連の活動を行うことができるようになった。また、休日に友達とボウリングに出かけるようになった者が6名おり、生徒同士でのボウリング場利用が授業期間中に延べ49回、授業終了後の1年間でも延



Fig.2 ボウリングお助け財布

支払行動を自発しやすいように、活動内容(往復のバス料金、シューズレンタル料金、ゲーム料金)を示すイラストとそれに対応する料金が入っている。

べ27回もあった。このうちの1名は16回も行っていたが、学校を卒業した今でも、友達を誘ってボウリング場を利用している。一方、ボウリング場の友達との利用がなかった者3名のうちの2名は家族同伴での利用があり、保護者からはボウリング場でスムーズに活動する我が子の姿を嬉しく思ったとの連絡が学校になされた。

2. 支援事例

(1) 事例1

① 対象生徒の様子

高等部1年生のD君は、作業場面では不要なおしゃべりが多く途中で作業の手が止まることもあるが、明るく活動的な男子生徒であった。家庭は本人、両親、姉、姉の5人家族。両親は、本人への支援に対して大変熱心で積極的であった。家庭からは、休日などに時間を持て余し、なにをするではなしに一人で外出することがよくあり、心配しているとの相談もなされていた。

② 支援経過の概要

ア 支援期間

x年9月～x+1年3月

イ 支援ツール

ボウリング場利用の手順をTable 1のようにし、その手順を「ボウリングお助けブック」として、13cm×10cmミニクリアブックに、右ページに各項目が言葉で、左ページにそれに対応する写真が示してあるようなものを使用した。

ウ 経過概要

ボウリング場を初めて利用した9月9日は教師の支援が一連の活動の約8割程度必要であった。そこで、9月17日に「ボウリングお助けブック」の制作を教師と一緒にいった。

そして、9月24日に、ボウリング場で、各手続きの場所へと移動しながら、「ボウリングお助けブック」の各項目を読んで、何を行うかを確認するよう支援した。

その後、E君との2人組グループになり、ボウリング場を5回利用した。その中で、1回目(10/10)は療育手帳提示と料金支払いに教師やボウリング場スタッフの支援が必要であったが、「ボウリングお助けブック」を参照しながら、シューズの自動レンタル機の操作ができた。3回目(10/22)は、D君がわからない場合にお助

けブックの参照を促す声かけをすることで、一連の利用行動ができるようになった。そして、約4か月後の5回目(2/3)の際は、ほとんどの手順を一人で行うことができた。

そして、休日などに自分からボウリング場の利用を家族に申し出るようにもなり、x年9月からx+2年3月の間だけでも、E君をはじめとするレジャー・スポーツ教室に所属した友達と一緒に16回もボウリングを楽しむ姿がみられた。

③ まとめ

これまで校外学習で出かける場所はD君にとって、休日に出かけるほどの魅力がないものか、魅力があってもその利用がD君一人では難しいものになっていたように思われる。しかし、今回のボウリングの取り組みでは、ボウリング場を利用するための支援ツールの導入、ボウリング場スタッフの協力によって、休日には友達を誘ってのボウリング場利用が報告されるようになった。また、本実践で導入した「ボウリングお助けブック」は、教師の指示や支援を最小限にし、ボウリングを友達と楽しむ体験を重ねる中で、次回を楽しみにして待つ気持ちや友達に積極的に関わろうとする態度も育んだものと思われる。

(2) 事例2

① 対象生徒の様子

高等部1年生のFさんは、明るく穏やかでのんびりとした性格の女子生徒であった。縫製作業や塗り絵などの好きなことや得意なことに対してはマイペースでこつこつと取り組み、細かな作業でも正確で丁寧な作業をすることができた。一方、掃除や買い物などの十分に習得していない手順を伴う活動に対しては消極的で、周りからの手助けや確認、称賛がないとなかなか活動が進まない様子が見られた。

家庭は本人、両親、弟、妹、祖父母、曾祖父母の9人家族。両親や祖父母は、本人への支援に対して大変熱心で積極的であった。母親から本人への要望として、やや肥満傾向にあるので一人でできる簡単な運動を身につけさせたい、年齢相応な趣味を身につけさせたいなどの項目が挙げられた。

② 支援経過の概要

ア 支援期間

x年9月～x+1年3月，
x+1年11月～x+2年3月

イ 支援ツール

「ボウリングお助けブック」を使用した。ただし、シューズレンタル機のサイズ、ボールについてはFさん用の写真とした。

ウ 経過概要

a 第Ⅰ期：x年9月～x+1年3月

ボウリング場を初めて利用した9月9日は教師の支援が一連の活動の約7割程度に必要であった。そこで、9月16日に「ボウリングお助けブック」の制作を教師と一緒にいった。

授業では、女子生徒3人のグループでボウリング場を5回利用した。その中で、1回目(10/10)は療育手帳提示と料金支払いに教師やボウリング場スタッフの支援が必要であったが、「ボウリングお助けブック」を参照しながら、シューズの自動レンタル機の操作ができた。2回目(10/15)はゲーム延長を一人で行う場面となり、「ボウリングお助けブック」を参照するように促した。3回目(10/22)は、フロントからシューズコーナーへの移動に際して、「ボウリングお助けブック」の参照を促すことが必要であった以外は一人で行うことができた。そして、約4か月後の5回目(2/3)の際はすべての手順を一人で行うことができた。またあわせて、授業の様子を写真を中心とした通信で家庭に提供すると共に、家族とボウリングに出かけるような機会を作っていた。

b 第Ⅱ期：x+1年11月～x+2年3月

「ボウリングお助けブック（改良版）」とし第Ⅰ期のものに、次の移動場所を示す言葉や荷物の整理、売店の利用などの周辺行動に関するページ、トラブルが起きた時用のページをつけた。

第Ⅰ期に行ったブックの利用が定着しており、「ボウリングお助けブック（改良版）」の使い方への支援は特段必要なかった。新たに追加したページについては、お助けブックの参照を促す声かけがあれば、写真を見ながら行動することができた。ボウリングゲームをしているとき、

機械が動かない場面があった。そのとき、「困ったときは、トラブルのページをみればいいよ」の声かけで、ボウリング場スタッフを呼び出すボタンを押すことができ、自分一人でトラブルを回避することができた。

また、ボウリングの授業、家族でのボウリングでの様子に関して、Fさんの母親から連絡帳を通じて感想が次のような寄せられた。

- いつもボウリングの写真をありがとうございます。家の様子とは違って生き生きしていて高校生らしくしっかりしているように見えます。
- ボウリングに行った日はスコアをいつも見せてくれます。点数はあまり出ないようですが楽しんでいようなのでぜひ機会を見つけてEさんと行かせてみたいと思います。
- 今日は家族でボウリングに行ってきました。靴を出したり、申し込みを書いたりさっさとしていました。そんな姿をととてもうれしく思いました。

③ まとめ

馴染みの薄い活動にはどうしても引っ込み思案になりがちなFさんであったが、今回の取り組みの中で、学校からボウリング場に出かける日になると「ボウリングお助けブック」などの準備を自分から進んで行ったり、「今日、ボウリング行くよ」などと教師や家族に積極的に話しかけたりしてくるようになった。こうした姿は家庭からの連絡帳の記述にもあるように周囲の者にとって、とても嬉しいものであった。

しかし、活動の広がりからすると、家族でのボウリング場利用は数回あったものの、友達同士での利用までは至らなかったことが今後の課題となった。保護者にとって、女子生徒だけのボウリング場利用についてはもうひとつ積極的になれなかったのかもしれない。ただ、社会の余暇資源を活用することはFさんの社会参加を確実に進めるものであると考えられる。そのためには、今後、ボランティアなどの人的資源の積極的な活用も組み入れた活動を考えていきたい。

IV おわりに

本稿で検討を加えた「総合的な学習の時間」の「クラブ」的な取り組みについての授業実践では、「生徒の興味・関心」を大切にしながら、個々の生徒がより主体的に取り組み、成功経験を重ねることができるよう、支援ツールが用意され、ボウリング場スタッフや家族の支援を受けながら、実地での活動が繰り返し展開された。このことで、いずれの生徒も毎回のボウリングを楽しみにし、家族とボウリングを、更には自分から友達を誘って楽しもうとする姿を見せてくれるようになった。

今回はボウリングの取り組みについて検討を加えたが、今後更に他の活動についても検討を加え、往々にして活動の場が制限されてしまいがちになる知的障害のある生徒一人ひとりが「自分の興味・関心」を実現し、達成できる喜びを感じることのできる「総合的な学習の時間」の取り組みのあり様を検討していきたい。

文献

- 坂本 裕・河田将一(2002)知的障害児教育における「総合的な学習の時間」の現状と課題. せいこつか&そうごう, 9, 130-137.
- 高畑庄蔵・武蔵博文(1997)知的障害者の食生活, 運動・スポーツ等の現状についての調査研究. 発達障害研究, 19, 235-244.
- 富山大学教育学部附属養護学校(2001)個性を生かす支援ツール. 明治図書.